

# 〔三〕 長 期 的 観 察 指 導

## — 中 等 教 育 段 階 に お け る 学 習 成 績 変 動 の 追 跡 的 研 究 —

戸 莉 進 持 田 都 也 高 須 照 夫  
富 田 昇 加 藤 佳 孝 服 部 晴 子  
鈴 木 陽 子

### < 概 要 >

昨年度から、われわれがこの研究を手がけるようになった直接の目的は、(1) 外部からの入学者との入学時における学力の開きが、年々大きくなってゆく附中出身の下位群を、何とかして救いたいということ。(2) 巾が広くなることによって、下位群に引き下げられて、上位群の伸びも制約され勝ちであることを、何らかの工夫によって脱却したいことであった。

それには、単に学力のみではなく、性格・態度・意欲など、多くの因子が作用していることは、十分に考えられるが、先づそれらの総合的な現われとしての成績のあるがままの実態を捉える事から手をつけようということになった次第である。

長期観察というような大それた研究テーマは、この仕事の在るべき姿・方向をわれわれ自身が忘れないために、後からかぶせられたものである。

以上に関連して、本研究の対象となっている生徒達（当附属中学出身の附高在籍生徒）の特質のいくつかを列挙しておく。

- (1) 中学では競争試験ではなく、義務教育の研究対象としての性格から、抽せんによって入学。
- (2) 高校入学時には、同じテストを、外部からの受験者には競争試験として、一方内部からの受験者には資格試験として適用している。因みに、本校に入学できなかった附中出身者で、名古屋市内の公立高校普通科に入学できたものは最近数年間では皆無に近い。（具体的状況は昨年の紀要の31頁を参照されたい<sup>(1)</sup>）。
- (3) 高校入学者に対する本研究の角度からの、具体的な学習指導上の試みを要約すると、  
43年度入学者：高1では入学時の学力差を考慮に入れたH・R編成。高2からは均質。  
44年度入学者：高1では、入学時の学力差を考慮に入れ、数学と英語のみ学力別展開。H・Rは均質。  
高2からはすべて均質。  
45年度入学者：高1から均質。

このような条件をもつ研究対象に対し、昨年度は第1報として43年度入学者についての試みの報告を、また第2報としてこれらの生徒達の中学段階での基礎資料を整え、かつ中学における軌道修正の方向を把握するための予備的な定性的分析を発表した。

本年度は、更に第2報の発展としての39年度附中に入学、44年度に附高を卒業した生徒の6か年の学習成績変化の半定量的分析を第3報とし、また第1報の発展としての、43年度入学者のその後の変化と、それと比較対照した44年度入学者の状況を第4報として報告する。なお本研究については、教育学部の塩田教授、大橋助教授、大西前教授、また聖霊短大の中尾助教授および瑞陵高校の長岡教諭の御指導や御協力を頂いていることを付記して謝意を表したい。